●座談会コメント●

「良い教材」と「教師の論理」

吉田章宏
（東京大学）

座談会では，「良い教材」とは何かということが中心問題になっているようです。そこでこんなことを考えました。ある「教材」を見れば直ちに,「良い教材」とそうでない教材との見分けがつくものだろうか？　もし見分けがそのようにつくものとすると，その見分けをする先生の目に，その時，映っているのは何だろうか？　また，その見分けがついたということは,その見分けが妥当であったということは，いつどうやってわかるのだろうか？また，一般的に絶対的に「良い教材」と呼ばれるような教材が，果たしてあるものだろうか？

例えば，「神田川と玉川上水」を教材とした先生が，「自分でたいへん気に入った」し，「非常にいい教材だと思った」のに，授業では「子供が全然食いついてこない」という貴重な経験例を述べておられます。こうした例の場合，先生が最初その教材に出合った時には，それをたしかに「よい教材」だと「見分けた」のであったに相違ないと信じます。

では，初めにそう見分けた教材が，なぜそうでないことになるのでしょうか？

「教師の論理だけで構成してしまった」たしかにそれも理由かもしれません。でも，教材の見分けにしても，授業にしても，結局は，教師は「教師の論理」によるほかないのではないでしょうか？　むしろ問題は「教師の論理」をさらに深く豊かにしていくことにあるのではないでしょうか？　では，深く豊かな「教師の論理」とは？

先生方は，教材の良し悪しを，その教材を用いた授業で，子供がどう反応するか，あるいは反応したか，によって判断しておられるようです。例えば，授業で，子供が「あくびをしない」，「食いついてくる」，「『あっ，そうか，わかった』と思わず叫ぶ」，「『実感』をもつ」「感動する」「興味をもつ」「すごくついてくる」とその教材は「良い教材」だとされるようです。それが，先生方が，実感のレベルでの判断の根拠とされていることのようです。そこで，もし，先生が教材の良し悪しを，結局は，授業での子供たちの反応によって判断されるのだとしたら，教材に出合ってその良し悪しを判断する最初の段階で既に，先生には，自分がその教材を用いた授業での子供たちの反応が，その教材と一緒に視野に入ってきて，生き生きと見えているのでなければならないことになります。そうでなければ，その見分けは不十分であり誤りやすいということになるでしょう。とすると，教材の見分けとは実は，教材だけを見ても本来できない性格のものなのだということになります。

教師である「私」がその教材と接して，「私」が子供に望んでいる反応をする――「あくびをしない」――だけでも全く不十分なのです。「あくびをしない」その「私」がその教材を用いて授業をした時，子供もまた「あくびをしない」ということを見通せていなければなりません。これは，実にたいへんなことだと思います。

それは，その時々の具体的な一人ひとりの子供の世界から，「私」自身がその教材を用いた授業を生き生きと想像し，その教材を，それぞれの世界から見ること，そして例えば，そこで「あくび」をしたり，「あっ，そうか」と思わず叫ぶことを生き生きと体験することを意味します。それは，一人ひとりの子供の世界に住みつくことを意味します。これは，人間としてたいへんな柔軟さと豊かさを求められる仕事なのです。その「私」の経験をもし文章に表現したとすれば，中勘助の「銀の匙」を何十冊，いや何百冊も，書くことを意味するでしょう。しかも，「私」がそうして生き生きと想像して準備してみても，いざ現実の授業にぶつかってみれば，子供たちは「私」のあらかじめの想像や予想などをはるかに超えた世界に生きていて，思いもかけぬ意見や質問を出してくるにちがいないのです。「あくび」さえもするにちがいないのです。

こうして，「良い教材」を見分けるとは，実は,「私」が教材を見ることには尽くされず，むしろ，子供一人ひとりの世界からその教材を見る，しかも「私」が授業でその教材を用いて教える際のその教材を見る，そしてその上で，もう一度，「私」の世界――豊かになった世界――からその教材を見る，ことなのです。「私」がもし「あくびをしない」以上のことを望むとすれば，この仕事はさらに困難になります。その困難さと奥行きの深さに，思わず嘆息せずにはいられないのです。